

令和2年度事業報告書

公益財団法人肥後医育振興会

熊本県における医学振興に必要な教育・研究の助成及び委託事業を行い、もって地域医療の向上と県民の健康増進及び日本国内外の医学・医療の進展に寄与するため、次の事業並びに支援を行った。

1. 医学教育・研究の助成（公1）

熊本県下の医・歯・薬・保健学系教育機関や医療機関に属する若手の個人又はグループに対して医学研究助成金を授与するため公募を行い、20名の応募者の中から選考委員会による厳正な選考の結果、以下の4名に授与した。

なお、研究助成金の授与とともに「肥後医育振興会学術奨励賞」を付与することとした。 *檜原知里氏は肥後医育振興会学術奨励賞のみ付与。

ありま ゆういちろう

有馬 勇一郎（40才） 熊本大学大学院生命科学研究部 助教 循環器内科学講座
「ミトコンドリアタンパクのアセチル化を介した循環器疾患形成機序の解明」

ひらやま まゆみ

平山 真弓（32才） 熊本大学病院 医員 中央検査部
「RNAヘリケースによるR-loopの制御を介した腫瘍発症抑制メカニズムの解明」
ならはら ちさと

檜原 知里（35才） 熊本大学ヒトレトロウイルス学共同研究センター
特定事業研究員 分子ウイルス・遺伝学分野
「全APOBEC3遺伝子欠損方法の確立とHIV-1感染における影響の解析」

さいとう ひろかず

齋藤 宏和（36才） 熊本市立熊本市民病院 医員 消化器内科
「総胆管結石症における内視鏡的膵胆管造影検査(ERCP)後膵炎の発症リスクについての多施設共同後ろ向き試験」

2. 医学国際交流の支援（公1）

熊本県下の医・歯・薬・保健学系教育機関や医療機関に属する外国人留学生に対して奨学生を授与するため公募を行い、選考委員会による厳正な選考の結果、以下の4名に奨学生を授与し、「肥後医育振興会優秀留学生表彰」を付与することとした。

ギ ホウ

魏 峰 熊本大学大学院医学教育部 博士課程2年（中国）

スッバ ラオ マデュラ

Subba Rao Madhura 熊本大学大学院医学教育部 博士課程2年（インド）

フ リョウホウ

付 凌峰 熊本大学大学院医学教育部 博士課程3年（中国）

コ キシン

胡 熙晨 熊本大学大学院医学教育部 博士課程3年（中国）

3. 熊本県民への医学医療情報提供活動（公2，公3，収1）

（1）「肥後医育塾」公開セミナーの開催（公2）

県民に対して、定期的に医学・医療情報を提供し、県民とともに考える健康と医療を目指す目的で、一般財団法人化学及血清療法研究所並びに熊本日日新聞社との共催で、市民公開セミナーを年3回開催した。

年間テーマとして「二人に一人がなる『がん』を正しく知ろう」を取り上げ、怖い病気というイメージを持たれる一方で、早期発見すれば完治できる病気でもあり、その正しい知識と最新医療を紹介した

第1回は、「がんの予防と早期診断～がんにならない、がんで死なないためにできること～」(R2.8.23、熊本市医師会館)、第2回は、「あなたがもし『がん』にかかったら～治療を受ける前に知っておきたいこと～」(R2.11.1、ホテル熊本テルサ)、第3回は、「知っておきたい次世代がん治療～がんの個性を知るための病理診断とゲノム医療～」(R3.2.7、熊本市医師会館)の演題で開催し、1回目は新型コロナウィルス感染拡大防止のため聴講者を50名に限定、2回目は約150名、3回目は県の緊急事態宣言を受け無観客で実施しYouTube公開を行い、後日熊本日日新聞紙面(R2.9.18、R.11.26、R3.3.5)及び本財団のホームページ上で内容を県民に公開した。

（2）北里柴三郎博士顕彰事業「新型コロナウィルス感染症を考える」の開催（公2）

新札の顔・北里柴三郎博士顕彰事業として、「新型コロナウィルス感染症を考える」と題する講演会を3月29日に熊本日日新聞社で開催した。感染拡大防止のため聴衆を入れず、講演採録をホームページに掲載の他、4月8日付熊本日日新聞紙面に掲載、併せて講演動画をYouTubeで公開した。

熊本大学ヒトレトロウイルス学共同研究センター教授の松下修三氏と熊本大学大学院生命科学研究部呼吸器内科学講座教授の坂上拓郎氏の2人が座長を務め、県内の医療関係者が感染症の対処方法などについて解説した後、事前に募集した質問に答えるコーナーが設けられた。

また、熊本大学名誉教授の二塚信氏による「明治の感染症と北里柴三郎博士」と題する講演も行われた。

（3）第11回「熊本県医療人育成総合会議」の開催（公3）

第11回の熊本県医療人育成総合会議は、「ウィズコロナ時代の臨床実習」のテーマで、令和2年11月23日（月・祝）に熊本大学医学部キャンパスで開催した。

昨年の本会議（第十回：「医学教育の世界標準化と診療参加型臨床実習」）で議論したごとく、近年の臨床実習の方法ではクリニカルクラークシップ（臨床参加型）が世界標準化してきている。この方法は、学生を医療スタッフの一員に位置付けるため、必然的に医療現場における医療スタッフの密度と患者との接触時間とを増大させる。

ところが今回のコロナ禍では、医療スタッフ密度と患者との接触時間の最小化最短化が至上命題となった。このため、一時的ではあれ、臨床実習体制は制限を余儀なくされた。臨床実習体制の再構築に向けて、実習シミュレーターとヴァーチャルシステムをいかに活用すればよいのか、また、それらが十全に機能したとして、残るものは何なのか、臨床実習の本質と課題について議論を行った。

会議では、新型コロナウィルスの理解を深めるために「コロナショックと社会の未来」と題して熊本大学ヒトレトロウイルス学共同研究センター松下修三教授から講演があり、医学、薬学、看護、理学療法のそれぞれの専門家から現状と課題が示

された。また、琉球大学で実施されているシミュレーション教育の紹介がおきなわクリニカルシミュレーションセンターの大屋祐輔センター長（琉球大学病院長）からあった。

これを受け総合討論に入り、臨床実習の本質や課題などについて議論を行った。

なお、開催に関しては実行委員会を設置し会議の内容の詳細を企画・立案した。参加対象者は、医療関係の大学・専門学校等の教育関係者、各医療技術者協会の代表者、病院関係の代表者、行政関係の担当者のほかに新聞等で学生や一般参加者も募り、約100名の参加があった。後日熊本日日新聞紙面(R2.12.23)及び財団のホームページで内容を県民に公開した。

(4) 生活情報紙「あれんじ」の健康・医学・医療、その他関連記事の編集及び刊行（収1）

熊本日日新聞社が発行するタブロイド版16頁の総合情報紙「あれんじ」（35万部発行）の第一土曜日号の10面と11面の見開き2頁を使い、健康・医学・医療並びに医学に隣接した学問分野の学術情報を県民に提供した。

内容としては、「元気の処方箋」（最新の医学医療記事）と「子育て応援クリニック」（小児科関連の医学医療記事）を12回、「慈愛の心・医心伝心」（女性医療人のリレーエッセイ）を8回、「四季の風」（俳句欄）を4回掲載した。

以下に「元気の処方箋」のテーマを記載する。

- 4月 起立性調節障害
- 5月 前立腺肥大症
- 6月 乾癬
- 7月 大腸がん検診
- 8月 緑内障
- 9月 お休み時間エクササイズ・自宅で健やかに（前編）
- 10月 お休み時間エクササイズ・自宅で健やかに（後編）
- 11月 永い「ポスト更年期」を健やかに
- 12月 新型コロナウイルス感染症
- 1月 パーキンソン病
- 2月 進化する整形外科の薬物治療～骨粗しょう症と関節リウマチ、薬物治療の今～
- 3月 食事の基本を大切に

4. 医学研究会・研修会等の助成（他1）

- (1) 熊本県下の医・歯・薬・保健学系教育機関や医療機関の研究者が開催する医学研究会並びに研修会等に対して次のとおり助成した。
 - ① 熊大病院群卒後臨床研修プログラム研修医育成（R2.4.1～R3.3.31開催）
 - ② 第20回熊本大学医学部医学科医学教育ワークショップ（R2.8.30開催）
 - ③ 第21回熊本エイズセミナー国際シンポジウム（R2.11.11～12開催）

6. 広報活動事業（他2）

- (1) 本財団の活動状況及び財政状況等を周知するために、広報紙「ニュースレター25号（A4判28頁）」を3,000部発行（R2.8.30）し、関係者へ配布するとともに本財団のホームページ上で内容を県内外に公開した。
- (2) ニュース性の高い分かりやすいホームページを目指し、内容を随時更新し、本財団の多彩な活動内容を県内外に公開した。